

芥川だより

発行日***2015年12月1日 e-mail:akutagawa_dayori@yahoo.co.jp

最新号から創刊号まで閲覧できます。 http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/

編集発行人 下村嘉明

発行所

☆ 着物から服へ

着物から服を仕立てます

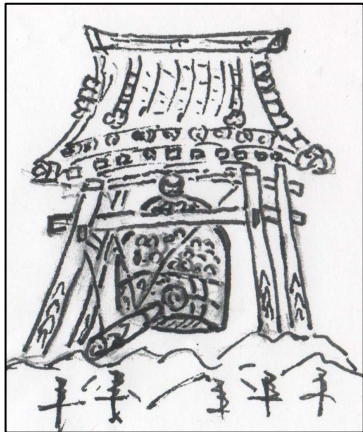
高槻市芥川町2 -1 4 -3

TEL 072-681-8870

梵

***** 一部100円です *****

除夜の鐘



古ぼけた大きなラジオがガーガーと雑音たてながら、紅白歌合戦やっているが、だれも聞いている様子ではない。月初めから降りだした雪が根雪となって積り、家の中も底冷えし掘りごたつの温まりも今ひとつ。新しい練炭にかえようかと言いながら足を入れる。親父は、夕飯が終わると消防の夜警に出ていき、爺さんは小屋へ引きこもったままだ。母は、正月の煮物を土間のおくどさんで炊いている。兄も帰らず、ひとりで聞くラジオもよく聞けず、つるし柿をしゃぶるが、かたいだけでもうひとつ甘みが無い。おもしろくないので、もう寝るかと思い奥の間にいき布団をかぶる。寝ながら、今日は大みそかだ、こうも簡単に寝ていいのか。大みそからしい何かを、と自問しだした。紅白の歌は、よくわからない。雑音が歌かわからないあり様ではどうしようもない。いろいろと考えをめぐらして、除夜の鐘を思いついた。これまで一度も聞いたことがなかったからである。

さっそく布団をはねのけて、土間にいる母に「除夜の鐘は聞こえるか」と聞いた。母は「知らんけど、坂原の寺は鐘をついてやかしれん」とどうでもよさそうに言う。坂原は川をへだてた東の山すその村である。同級生も幾人かいて、秋祭りに誘ってくれて神輿を見に行った。大きな神社はあったが寺はどこにあるのか知らない。かなり遠いが聞こえるのだろうか。除夜の鐘は真夜中であるから、母に起こしてくれるように頼んで寝た。

夜中に母に起こされて、雪が積もった庭に出て聞いた。じっと息を殺して聞くと鐘がなっている。たしかに鐘の音である。ほかには何も聞こえないから、あの音が除夜の鐘にちがいない。村中が寝静まっている夜中に、ほのかに、ゴォーンと聞こえた。あれが除夜の鐘か、と期待はずれしながら冷えた身体を寝床にもぐらせて寝たのである。

今年の大晦日、麻耶山の名前の由来になった天上寺の除夜の鐘を六甲山中で歩きながら聴こうという魂胆をもっている。六甲の縦走路を宝塚から新神戸まで歩いて最後の登りを登りきった頂上のすぐ下で大伽藍を配する真言密教の天上寺はある。幼く煩惱もなかった頃の私だったから、響かなかった除夜の鐘だが、今の私に鐘の音は何を思わせるだろうか。

死をめぐるあれやこれ(15)

石川 吾郎

先生の思い出

年末になると中学校のときの理科の先生を思い出す。酒井先生といつて私のクラスの担任だった。年は五十前だったろうか。笑顔の優しいがっちりした体格の先生だったが、私はあることで厳しくしかれたことがあった。しかし、とくに先生が嫌いになるということとはなかった。◆先生は山男で、毎年のように年越しを山の中で迎えるのだという。ある年、大晦日を雪山の雪の洞穴で迎え、ラジオで聞いた紅白歌合戦が身にしみた。吹雪の収まった夜空には天の川が空いっぱいに広がっていた。そんな話をしてくれた。◆当時天文少年だった私は、山登りに興味はあまり湧かなかったが、まだ見たことのない、空いっぱい天の川には憧れた。◆それから二年ほど経って、その酒井先生が亡くなったという知らせがあった。クラスの友人たちと葬式にいった。私の住んでいた岐阜市の郊外の田園地帯に先生の家はあった。先生の死に顔に直面して、不思議な気持ちに襲われた。もう先生の笑顔はこの世に存在しないのだ。先生の家は庭先には足踏み式の脱穀機があつて、それが妙に印象に残った。◆もうあれから五十年近く経ち、とくに私は先生の年齢を超えてしまった。不思議なものでもいいまで経っても記憶の中で先生は先生のままなのだ。◆私の同年代の友人の中にも何人か教師を勤めた者がいるが、彼らも教え子の記憶の中で、いつまでも先生なのだろう。

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム	石川吾郎	1
マスコミが伝えないニュースの側面	伊藤明	2
あなた本心に「自由」といえますか	祖蔵哲	6
闘病記 31	下村嘉明	8
おつちよこチョイぼけ 33	A O	9
素老人☆よもだ帳 21	坂本一光	10
世界一周旅行記 18	若山哲郎	11
大人の今昔物語 17	石川吾郎	12
言葉が熟するということ 2	大江雉鬼	14
編集後記	嘉	15
統一候補のファンクラブ	眞純	15
女90年の軌跡	眞純	16
俳句	土田裕	16

みんなで知ろう日本の危機(6)

マスコミが伝えないニュースの側面

伊藤 明

はじめに

最近の日本の商業新聞やテレビが（これにはNHKが含まれるというか、NHKが特に顕著）、政府や権力を持つ者たちへの一定の批判をしていくという、ジャーナリズムの本来はたすべき役割を放棄してしまつて、ほとんど政府の広報機関の様相を呈する状態となつてしまつています（NHKニュースは公平を装つて、

これをするのでより注意が必要。この結果わが国、われわれ国民にとって重要な事実や政府の動きなどが国民の目から隠され、そのかわり些末な議論へと注意をそらす、ということが意図的に行われています。国民の生活を守り経済を発展させるためには消費税増税をやめよ、と正しい意見をマスコミは言わず（出演者にも言わせず）、微々たる軽減税率などについて愚かな議論を延々と垂れ流し続ける、というのはその代表的なものでしょう。少しでもリベラルな報道に対して、直接・間接に政府が圧力をかけ続けていることが背景にあるとみられます。

そこでこの記事では、最近伝えられたニュースをとりあげ、マスコミではあまり伝えられず隠された意味について考えてみることにします。名付けて「マスコミが伝えないニュースの側面」。

この国の置かれた状態

まず戦争法の強行採決から三ヶ月ほどが経過しています。憲法違反の戦争法が強行採決により「成立して」しまつている今の状態は、憲法という最高法規が守られていない異常事態にあるといえます。つまり立憲主義が守られない国家として危機的な状態なのです。権力者が憲法を守らずに自分勝手なことをするのは専制政治です。安倍政権は専制政治を行つていくことになりました。この事実をしっかり心にと刻み込んでおく必要があります。

辺野古基地問題

実際に沖縄の辺野古基地問題では、政府は沖縄県の意志を代表する知事の反対を無視して、ごり押しで埋め立て工事を強行しています。沖縄に対する安倍政権の暴政は、戦争法と根が一つだといえます。本来は国が使えない「行政不服審査法」を悪用して工事再開ができるようにし、その上で地方自治を蹂躪した「代執行」で知事の権限を取り上げようとする。さらに名護市の頭越しに地域に補助金をばらまくという地域の分断をねらう姑息な手段も使っています。これはもはや法治主義・民主主義の国とは言えないでしょう。

さらに野党が憲法五十三条に基づく野党の臨時国会召集を要求しましたが、安倍政権は外遊日程と合わないという理由でこれを無視するという、憲法違反を平気で犯しています。

同時多発テロ

この一ヶ月間のニュースの中でもっともショッキングなものは、パリで起こった百三十人もの犠牲者がでたISによる同時多発テロ事件でしょう。この経過などはマスコミが詳しく報道しています。しかし同じ日にかけてパリの他にベイルートとバグダッドでもISによるテロ攻撃で大勢の人が命を落としましたが、こちらはあまり報道がされませんでした。先進国フランスの首都パリでの犠牲者だ

けに世界から同情が集まるというのは、健全なあり方ではないでしょう。

パリ同時テロの犠牲者の一千倍以上（イラクだけで十四万人）の罪のない人々を空爆で殺してきたのが米国を中心とした諸国です。空爆による大国の無差別な大量殺人が非難されないという不条理は看過できません。突然の空爆で、近親者を失ったイラクやシリアの人々が、空爆した大国を憎み復讐をしようという心情は、想像力を働かせれば理解できることです。テロに対しての闘いが空爆だとするのでは問題の解決にならない。暴力の応酬と不平等が、さらなるテロを産むことになるでしょう。

同時多発テロを受けて、フランスのオランド大統領は緊急事態を発動し、シリアへの報復空爆の挙にでました。これは、9・11の時の米国を思い出させます。

このときには米国は、タリバンに対する報復といって、アフガニスタン、パキスタンへ次々に空爆を行い、さらにイラク・フセイン大統領が大量破壊兵器をもっているといつてイラク戦争を開始したのでした。しかしイラクには大量破壊兵器はなく、フセイン大統領もタリバンとの関係はなかったことが後で明らかにされました。そしてイラク戦争によつて中東地域は現在の混沌状態に陥り、今回同時テロを起こしたISも、そこから生まれてきたといつていいのです。

そしてイラク戦争により、大もうけを

したのが米国の巨大軍需企業や、戦後のイラク復興のインフラ整備を請け負ったハリバートンといった政府の中核と結びついた巨大企業（当時の副大統領チエルニーはハリバートンの経営者だった）であつたことは有名です。（このあたりの経過はこの記事でも何度も紹介しています）が、堤未果氏の「政府はいつもウソをつく」という本ないし同名のユーチューブ動画を見て頂くとよく分かります。尚、本紙一〇二号、T P P特集の本記事を参照ください）

テロ後の安倍政権の動き

この同時多発テロによって、安倍政権の中に注目すべき危険な動きが出ていますので、ぜひお伝えしなければなりません。今年一月の安倍晋三首相のカイロ演説を機に、じつは日本もISから「敵国」と認定され、一般日本人と在外公館を標的にすると宣言されています。実際二人の日本人が惨殺されたのは、この演説がきっかけになっているといわれています。海外からみれば、安倍首相の言動は国民が総意としてその路線を選んだように映っても不思議ではありません。つまり日本でもパリと同種の事件がいつ起きても不思議ではない状態になっているのです。今回、安倍首相はG 20サミットの中で、仏外相に「日本はフランスと共にある。できることは何でもする」と支援を約束したといえます。安倍首相はこういった

海外での派手な言動と安保法制によって、イスラム過激派を無用の刺激をあたえています。この結果来年予定の伊勢志摩サミットやさらには東京オリンピックもテロの危険性はぐっと上がることが予想されます。テロに対して屈することはできませんが、むやみに刺激をしてわが国にテロを呼び込むような言動を一国の元首がするべきでないでしょう。テロについて簡単な解決策はありません。空爆をすれば解決どころか憎しみの連鎖を産み、ますます泥沼にはまることは明らかです。ここは外交的な知恵を駆使し、したたかに立ち回ることが国として必要です。

憲法違反の戦争法制をもたず、集団的自衛権のない従来のも日本であれば、ISのテロ対象になる可能性も極めて低く、また独自の外交を展開すれば、テロ問題の解決に寄与できる貴重な立場となる可能性もあつたと思われませんが、今となつてはそれもできません。各国との連携は必要でしょうが、勇ましく突き進むという愚を犯してはならないと考えられます。一方国内で安倍政権は、このISによる同時多発テロを、**ショックドクトリン**（惨事便乗型政策とも言われる）として利用しようとしています。ショックドクトリンというのは、クーデター・戦争・災害・テロなどの発生によって、国民がショックを受けて茫然自失の状態にあるのに乗じて、一部の人間が（とくに新自由主義的なグローバル巨大企業の経営者

たち。彼らは政府を操る存在でもある）、自分たちの儲けになるシステムをその国に無理やりに導入し、国のシステムを自分たちに都合のよいように根底から作り変えてしまうことを指します。

つまり安倍氏がわが国にテロを呼び寄せようとしているのは、意図的にそうしているのではないかという疑いです。というのもテロが国内で発生したりすれば、**緊急事態宣言の制度が必要だという、改憲への世論が誘導されます**。今後テロ撲滅を口実にして、米国などの展開する戦闘行為の支援として自衛隊を出動させ、自衛隊員の中に犠牲者が出れば、これをチャンスにさらに憲法改定へと世論を誘導するもくろみを安倍政権は画策するものと考えられます。

緊急事態宣言というのは、国家が国民の人権を制限することが可能にさせる制度です。安倍首相は、**来年参院選後にもくろんでいるといわれる憲法「改正」で緊急事態条項をとりいれようとしています**。実際に自民党の準備している憲法案では、緊急事態に「内閣は法律と同一の効力を有する政令を制定することができる」ということが明記されているのです。これは内閣総理大臣が「緊急事態」を宣言し、全権を掌握できる条文です。これによって国民の人権を制限することが可能になり、国家が国民を統制していくのです。さらに**これが「緊急時」だけでなく、常時化していく**、というのが安

倍氏のシナリオでしょう。この改定により総理大臣は合法的に独裁政治を実施できることになるのです。麻生財務大臣が先だって語ったように「**ナチスの手口に学んで**」いるのです。現在の日本がナチスや戦前の日本と同じ経路を辿ることになるのを国民として放置するわけにはいきません。

もう一つ、自民党がパリのテロに便乗してこれも憲法違反の「**共謀罪**」新設を言い出しています。

「共謀罪」新設の動き

共謀罪というのは、二人以上の者が、犯罪を行うことを話し合つて合意することとを処罰対象とする犯罪のことです。具体的「行為」がないのに話し合つただけで処罰するのが共謀罪の特徴です。しかし単なる「合意」というのは「心の中で思つたこと」と紙一重の段階です。この共謀罪は刑期四年以上の犯罪について対象になるといいます。対象となる犯罪は六百種類あまり。ほとんどあらゆる分野の犯罪が該当します。二人以上の者が話し合いをして合意するだけで、罪となるという法律なのです。たとえば、二人以上で飲み屋などでも会話を交わすだけで、犯罪とされる可能性があります。これはまた「未遂」「予備」「共謀」を例外とする我が国の刑法の大原則に合致しないものです。これとともに、盗聴や検閲

も公然とされることになるでしょう。またネットのチャットなども対象になるとも言われます。このように個人の自由・言論の自由を剥奪する恐ろしいものです。さらに**密告をした者を罪に問わないので日本が密告社会になっていくこと**になります。

憲法学者の小林節氏によれば、「共謀罪により政府批判も自粛せざるを得なくなる。共謀罪は憲法違反、北朝鮮のようになつてしまう。かつての治安維持法と同じような機能をはたす」と語っておられます。**平成の治安維持法と表現されるのです。**

共謀罪は、これまでも幾度も国会に上げられてきましたが、その内容のあまりのひどさに繰り返し廃案にされてきたという経過があります。しかし今回テロを口実にして、これまで通らなかったこの共謀罪を通そうとするのです。(日弁連が共謀罪反対のパンフレットをネットで公開していますので、そちらもお読みください。)安倍首相は、この共謀罪の新設について「重要な課題と認識している」と語っているのです。

安倍氏は、いったん選挙で選ばれたら自分が決めるので、民意はいらないと述べるような専制主義的な考えの持ち主で、議會を無視して、国民を縛り、この国を警察国家、戦争をできる国にしていこう道を進んでいるといえます。

景気後退と消費税増税

先般の内閣府発表によれば、今年の七月九月期の国民所得統計で、国内総生産(GDP)は二期連続のマイナスとなつたことが明らかになりました。物価変動を除いた実質で前期比〇・二%減、一年間続くとして計算した年率では〇・八%減です。GDPは昨年4月の消費税増税のあと2期連続のマイナスとなり、年度後半はプラスとなつたものの二〇一四年度全体では〇・九%のマイナス、一五年度も年度当初から二期連続のマイナスで、落ち込みは深刻です。一四年四月の八%への消費税増税以来、物価上昇をしたが名目の賃金上昇は起きず、その月だけで実質賃金三%低下。第二次安倍政権のはじめからすると実質賃金五%低下したということです。消費税増税が、暮らしと経済を破壊していることは明らかです。

米国の定義では二四半期連続のマイナス経済成長に陥つた場合、景気後退(リセッション)といわれます。つまりアベノミクスの下、**日本経済は二年連続景気後退**したということです。日本は再び不況に戻つてしまつているのです。二年連続で日本を景気後退に陥れた政権は安倍政権が史上初であり、国民をもっとも貧困化した政権といえるということです。アベノミクスの破綻は明らかなのです。

安倍政権の経済政策の特徴は、金融緩和や規制緩和で大企業の利益を増やせば、雇用や賃金が増えて消費が増え設備投資

も拡大して経済が上向くという「トリクルダウン」(したたり落ち)を期待するといふものです。しかし三年間にわたつた「アベノミクス」の結果、大企業の利益は増え、記録的な水準に達していますが、賃金の上昇や雇用の拡大は進まず、設備投資も増えず、「トリクルダウン」も起きていません。賃金アップをはかる実効的政策が何一つなく、国民を貧困に陥れる政策ばかりで、需要は伸びようがないのです。

アベノミクス下で、大企業は空前の収益をあげていますが、それは株主への還元と内部留保にまわるのみで、賃金アップにはつながらない。また設備投資にも回らない。株主への配当はその多くが海外の投資家に流れていくことになるのです。内部留保には税金もかかりません。安倍政権は経済の好循環を言いますが、大企業が大幅に上げすればするほど消費や投資が落ち込む「悪循環」が「アベノミクス」の特徴です。

マスコミ各社は、GDPが二期連続のマイナスであったことは伝えましたが、アベノミクスが破綻しているということとは、全く言おうとしない。それどころか最近のマスコミはそろって、消費税増税を前提にして、わずかな枠の軽減税率をどうするかといった些末な議論ばかりを伝え、そちらに国民の世論を誘導し、消費税増税を止めさせる方向に世論を向けさせないという、安倍政権の援護ばかり

をしているのです。ここでもNHKの政権援護の役割は大きく、罪が深いといえます。

経済協力開発機構(OECD)は先ごろ「日本経済が消費税増税によってさらに成長が鈍化する」と警告しています。消費税増税の中止がいよいよ重要で、消費税は国民の生活を困窮させ購買力を奪っていきます。消費税の一〇%への再増税はぜひ中止をすべきです。

もともと税制というものは、それ自体、社会に組み込まれた安定装置としての役割を果たすと言われますが、その中で消費税は格差を拡大する作用をもっています。低所得者には負担が重く、富裕層には負担が少ないのです。まして政府は消費税増税には、必ず法人税減税をペアで行つてきており、消費税増税分は、大部分がこの法人税減税の減少分の補填になるだけで、ほとんど社会保障や福祉分野にまわることはないのが現状です。従つて消費税増税は法人税減税をするために存在するといえるのです。この他に消費税増税がなされると、国から輸出企業に支払われる「**輸出戻し税**」というものが自動的に増額され、輸出企業は大幅に下げられるというところでもない仕組みがあるのです(これについては本紙一〇五号を参照願います)。このことから**経団連が一貫して消費税増税を叫んでいること**を知っておく必要があります。

政府はこれ以上の消費税増税をせず

(法人税減税もせず)、国内の需要を増やすまっとうな政策を行い、賃金を上げ国民の国内購買力を上げることが今緊急に必要なことです。とくに「介護離職を減らす」とするのなら、危機的な介護分野に対しての財政出動を行うべきでしょう。

政府は常に財源難を叫びますが、この秋野党から要請された臨時国会の召集をさける(これは憲法違反ですが)ために安倍氏は中央アジアを歴訪しましたが、驚くべきことに「中央アジアの北朝鮮」といわれる独裁体制のトルクメニスタンに二兆円の支援をした(ほとんど見返りの期待できないもの)という事です。バラマキ外交の極みと言えます。(安倍政権の三年間にバラマキは二六兆円に上るということですが)この資金を一部でも国内の福祉や社会保障、産業振興にまわすことは十分できたはずなのです。

厚生労働省が四日発表した二〇一四年の調査によると、パートや派遣などの非正規社員が労働者にしめる割合が四割に達したとのことです。また企業の内部留保は三百五十四兆円にのぼり、ワーキングプアは千四百四十万人となり、日本は先進国最悪の非正規差別大国になってしまっているのです。

このように見てくると、安倍政権がいかに国民の大部分の利益に敵対し、大企業に利益のみに奉仕する政権であり、この国を戦争へと導く危険な政権であるかが分かります。

大阪ダブル選挙の結果

この文を書いている間に、大阪ダブル選挙で維新勢力が勝利を治めたというニュースがありました。結果については言う言葉ありません。もともとこの選挙が、最悪を選ぶのか、それよりすこしだけましなものを選ぶのか、という選択を迫るものでした。

それにしても先般の大阪都構想の住民投票を「ラストチャンス!」と言っていたのに今回再度同じ公約を掲げたのは、「ウソ」だったということ。こういったウソが今後もあり得ることには我々は強い警戒が必要でしょう。また今回の選挙結果には、NHKの維新勢力を持ち上げる「選挙応援」といっていいほどの異例の偏向報道があり、少なからずこれが選挙民の投票行動に影響を与えたことが推測されます。

今後大阪の行く末がどうなるのか不透明ですが、橋下氏は今後国政に打って出るようになるだろうことが予想されます。この人物は安倍氏以上に専制的手法を好み、民主的手続きを無視する傾向が強いという話題に事欠かない点が懸念されます。おおさか維新勢力は、安倍政権との水面下の連携を行い野党勢力の分断をはかり、その結果安倍政権の補完勢力となる可能性が大きいと見られます。橋下氏は安倍政権の一員になることでさえ否定できないことでしょう。

野党共闘について

以上で見てきたように、このまま安倍政権の暴走が続けば、この日本社会は根本から破壊されつくされてしまします。これを止めるためには、来年の参院選の重要性がますます大きくなります。そのためには、憲法違反の戦争法制を廃止し、安倍政権を倒すことで一致するための勢力を結集して、その代表を議会に送り込む必要があります。これを実現するためには選挙協力が必要で、一人区では反安倍候補を一人に絞ってこの候補に投票をする戦略でいくことが不可欠です。現在共産党をはじめとして、社民党、生活の党などはこの構想で一致をみているようですが、民主党では解党論などが存在し、混乱をしているようです。

ここで認識すべきは、この選挙協力に参加しない勢力は、結果として安倍自公政権の補完勢力に他ならないという点です。

来年七月の参院選は、極めて重大な意味をもちます。ここで安倍政権の暴政をとめなければ、上に述べた憲法改悪・共謀罪、言論への弾圧、景気後退、格差の拡大、テロの呼び込みなど、戦前の社会へと日本を逆戻りさせられる可能性がぐんと高まることになってしまふと考えられるからです。

「反安倍野党共闘ファンクラブ」の提案 私たちは、この参院選にあたって「反

安倍野党共闘ファンクラブ」というものを提案したいと思います。つまり野党間の選挙協力で反安倍のどの野党の候補者が立っても、その候補者に投票をしようという意思表示をする、というものです。このファンクラブの会員が多くなればなるほど、野党共闘への推進力としてはたらくようになるのではないかと考えるからです。これは個人でできることではありませんので、広く賛同する団体を募りたいと思っています。

最後に前回にも引用した米国の大投資家ジム・ロジャース(この人は投資により日々巨大な資産を稼ぐ、アベ側の人物ですが)の言葉を再び引用しておきましょう。この言葉は、政治のすべての側面においてますます現実となっているからです。「安倍晋三首相は、日本を破綻させた人物として歴史に名を残すことになるでしょう。いまから十年二十年経って日本人の皆さんは気づくでしょう。安倍総理が日本を滅ぼしたと」。このような人間をこの国のトップに居座らせ続けてはならないのです。



あなた本当に「自由」といえますか、二つの「自由」を考える

現在の世界経済を席卷している「新自由主義経済」について、その経済的思想そしてそれは何処から生まれたのかをこしばらく考えてきました。こうして様々に検討していくに連れてその中心になるのは、やはり「自由」という概念です。「自由」とは何なのかというテーマは古くて新しいものです。「表現の自由」とは何か。「も未だにはつきりした答えを得られていない問題です。小生は中学生のころ、当時よく読まれていた少し難しい「自由と規律」という岩波新書を読んで漠然と自由というものは堅苦しいものだという印象を持ったものです。そこではイギリスの伝統的なブリックスクールの団体生活を通して自由というものを考えるという内容であったために、まず規律を守るという厳しさが前面に出てきていたからなのでしょう。この「自由と規律」は「権利と義務」の関係に良く似ています。個人が社会生活を営む上でお互いが相補関係にあるということですね。一方が大きくなれば、もう一方は小さくなります。このように「自由」という言葉は人間の社会生活との関連で語られることが多いのですが、個人的な意味

においても使われます。「自由を考える」とか「自由を選ぶ」とか自分の「意思」についての「自由」です。というわけですが、「自由」ということは様々な意味をもつようです。

この原因はどうやら日本語の「自由」という言葉自体に問題があるように思われます。承知のように日本語は外国語の借り物です。最近日本語が韓国や中国語に逆に輸出されているようですが、元来は漢文から、そして近代は西欧からの輸入であります。言葉を輸入しなければならぬということ、そういう行為や事実が部分的にあっても社会的一般概念になっただけでなかったからです。多くの外国語はほとんど明治期に日本にもたらされました。これが「近代化」という西欧化の始まりでもあります。「Liberty」の訳には「自由」という言葉があてられました。それまで使われていたのもとも「自由」は「自ずからに由る」という意味があり「自分で好き勝手にする」とか、むしろ仏教用語の「自由自在」、つまり悟りの境地を表現する言葉でありました。西欧の「Liberty」は「拘束や制限からの開放」という意味であり奴隷状態や固定的従属状態からの解放を指します。自由の女神の「自由」はLibertyです。一方同じような言葉「Freedom」は「己の自由」であり、むしろ日本から従来ある概念に近いと言えます。「Liberty」が「奴隷解放」の「自由」とすると、それまで日本

では奴隷制度や従属関係がなかったのかというところではあるません。奴隷は弥生時代から江戸時代までいたし、明治期になっても人身売買は行われ続けていました。固定的従属関係は「土農工商」など身分制度としてはつきりしていました。言葉としてなかったのはそれが当たり前であつたからであります。それに抵抗したり覆したりしてはじめてその状態が言葉になる。さらに特徴的なことは、西欧諸国は絶えず異民族との争いにさらされており支配者が変われば言語も異なるため制度として明文化する必要もあつたということも考えられます。ローマ法など

はそのひとつですね。しかし、日本においては地理的状況においてそのようなことが起こらなかったためせいぜい中国に習って律令を整備した程度でほとんど慣習により制度が維持されていたと思われる。要するに「奴隷状態」はどちらもあつたがそれが日本では社会的に問題意識にあらなかつたのでしよう。しかし西欧でさえ「Liberty」という「自由」が言葉として登場するのは近代市民革命期以後です。

さて「自由」には大きく分けて二つあります。個人が外（社会）に働きかける時の「自由」と個人内に対する「意思」の「自由」です。何度も言いますが「言葉」というものは現実を後から説明するもので、あくまで「事実」が先です。人間が存在していた当初に今の概念という

「自由」はまったく存在していません。「自由」という概念すなわち「思い」や「気分」がなかったのだからそれに対する「不自由」の概念もありません。原始共同社会生活においてこのような「自由」「不自由」の概念はなく、すべて自然の計らいごととして受け入れていたと思われれます。ではそれはどこから生まれたのか。社会的規模の拡大、生産手段の高度化により個人の生活範囲が狭まり争いが生じ、支配体制が出来、集団も個人も従属関係の中に閉じ込められた時よりこの概念の萌芽が発生したと考えられます。

まず個人が社会に対して行う「自由」は社会的な「自由」から考えてみましょう。先にも話しましたが、これは近代的概念の「権利」として現れます。近代法では「自由権」は三つあるとされています。一つは「精神的自由」これは社会に対する個人の知的活動のことで。「思想信条の自由」「表現の自由」。などが憲法で保障されています。二つ目は「身体的自由」「社会的拘束からの自由」「奴隷的拘束」「逮捕、刑罰」「苦役」。三つ目は「経済的自由」「経済活動に関する自由」「財産権」「職業選択」です。いずれの「自由」の権利も一定の制限が付きまします。公共の利益を優先する「公共の福祉」とか他人に迷惑をかけること「危害原則」などです。この制限は先ほどの「自由と規律」に見られたように相補的なもので一方が大きくなればもう一方は小さく制限され

ます。

さて、この社会的自由の三つのうち「精神的自由」と「身体的自由」は比較的分かりやすいのですが「経済的自由」というのは少々分かりづらいですね。なぜ経済活動の自由をわざわざ別に定めなければならなかったのでしょうか。これを理解するには「自由」という概念がすべて歴史的なものであるということを再度思い出す必要があります。そもそも先史、人類は単独つまり個人で生活をしていたわけではなく個人の集まりである家族、更に共同体において暮らしていました。その規模が大きくなり民族になり、そして近代になれば国家となり生活圏が拡大していったわけです。その社会集団は個人の目的追及よりは集団全体の目的追求を優先させます。すると自ずと個人の「自由」が制限されるのです。そして「自由」という原始概念はいつか忘れ去られ社会に埋没されていきます。「所有」という概念も同じです。個人の所有から共同体の所有へ、そして国家へとその「権利」はだんだんと個人から離れていきます。しかし、経済活動の基本はあくまで「所有」です。経済活動の基本である「交換」というのは自分が「所有」しているから成立する行為です。自然物の所有は歴史的に、個人から共同体に、そして現在は国家に属します。ここで注意してほしいのは国家が全てを「所有」するといっても共産主義的国家のことを言っているの

ではありません。資本主義国家であれ共産主義国家であれ、国家はその所有の自由、権利を制限しているのみです。個人の所有を緩和すれば資本主義であるし、制限が大きくなれば共産主義に近づきます。そもそも自然物自体のオリジナルな所有者はいないはずからです。この大地は、海は誰のものか。しばらく考えても私達、日本人には答えは浮かびません。ところが世界の多くの人々にはすぐに答えます。それは「神」のものと。

世界宗教には「一神教」と「多神教」という分類があります。キリスト教やイスラム教はゴッドやアッラー一人を崇拜するから「一神教」であり、一方、仏教やヒンドゥー教などは神様が沢山いるから「多神教」とされていますが、これは正しい宗教理解ではありません。その違いは世界創造神を唯一として認めるかどうかにあります。周知のようにユダヤ、キリスト、イスラム教の神は世界を6日間で創造しました。世界の所有者は神なのです。仏教などにはその考えはありません。世界は「もともと」あったのです。極端には「色即是空」、そもそも何も無いのかもしれませんが。そういう西欧とて最初からそう考えではありませんでした。ローマ帝国がキリスト教を公認し、また対抗としてイスラム教が世界に広まるにつれてこの思想は普遍化されていくようになったのです。つまり所有は普遍的宗教的概念へと拡大されたのです。そ

うなると個人の経済活動も最終的には神のもとに返さなければならないという「義務」が発生するわけで、その意味で「経済的自由」は大いに制限されていたのです。その制限がはずされるようになってきたのが宗教改革やルネサンスを経て再び人間個人に目が向けられるようになった頃からです。近代になって「神は死んだ」といわれ絶対の神から人間が開放されるようになってきます。すると同時に「所有」も「自由」も個人にまた戻ってきたのです。こうして「経済的自由」は「自由」の中に組み入られるようになったのです。では日本での経済活動はどうだったのでしょうか。絶対の神がい無い日本では共同体意識がうまく、労働は神のためではなく共同体のためという、いわゆる職人的経済価値観が発達したように思われます。ここから経済的所有と自由が再び近代になって問われ、西欧に近代的経済活動の「自由」と結びついたようです。

このように考えると「社会的自由」「精神的」「身体的」「経済的」の3つとも非常に世界歴史的なものであるということが改めて分かります。歴史が進み価値観が変化するとそれにつれて言葉が必要になりまたその概念も変化するので。哲学は前回も行ったように歴史を時代が遅れて語ります。「精神的自由」「身体的自由」を語ったのは「社会契約論」を巡るホッブスやロック、ルソーなどで

す。自然状態の人間は闘争に明け暮れてしまふ、だから互いが国家というものと契約してその安定を保証しようという考えが基礎です。しかし国家観の違いが3人にあり、名誉革命からフランス革命へとより過激な変革になっていくのです。ここで重要な人物がジョン・ロックです。彼は私的所有ということを始めて哲学的に承認しました。その根拠は「人間は自分の主人」であり「神のただ一人の僕」であるというものです。この時代の啓蒙思想というのは、教会や王が支配していた従来の世界から、当時台頭してきた市民階級ブルジョワジーに権力を譲るための思想的根拠の役割を担っていました。マックス・ウェーバーという有名な社会学者がいましたが彼は資本主義を発達させたのはキリスト教のプロテスタントの勤勉を尊ぶ精神であると言っています。ルターらが始めた宗教改革ですね。それまでのカソリックの倫理観は、全ては教会の為に、でしたが、それを転換し、個人の富を追求することで約束されている神の国に行けるのだと考えたのです。これも思えばご都合主義ですね。ブルジョワ階級が自分達の利益追求を正当化するために作り出した理屈でありましょう。こうしてルターは神の手から富を収奪しロックはその私的所有権を正当づけたのです。

見てきたように「社会的自由」というのは極めて西欧的な概念なのですがそれ

闘病記 (31)

梵店主

は「キリスト教的制度からの自由」をも意味していたのです。さらに、この「制度からの自由」を「経済活動の自由」に置き換える根拠をしたのがアダムスミスの「自由放任」(あるがままに)です。神の見えざる手によって社会調和が働くというかなり楽観的な思想ですが、ともかくこれが資本主義の原点になったわけです。これらの啓蒙的自由思想はイギリスの議会制度、フランス革命、アメリカの独立、奴隷解放などといったフランスの面も生み出しました。しかし今まで話をしてきたように経済制度的には度重なる恐慌を、思想主義的には全体主義、共産主義などの対立を経てその姿が変貌してきているというのはご案内の通りです。

さて、まだまだ「社会的自由」の話はつきませんがそろそろもう一方の自由、人間の内面に向かう意識の自由に入りましょう。これこそが本来の哲学が扱う領域なのです。哲学では「自由意志」とよばれていて今も限らない議論がなされています。ご存知のように哲学というものは皆が当たり前、当然と考えていることを疑います。自由も然りです。ここに練習問題をだしましょう。あなたの目の前に同じコップが二つ置いてあります。どちらか「自由」を選んでくださいと言われた時、本当に自由に選んでいるといえるのかどうか。という問題です。さあ、来月まで考えてください。

よっちゃんは、すっかり入院患者の古株になってしまった。三ヶ月も入院している患者は周りにはいない。看護師たちとも顔なじみになり、入院生活も要領よく出来るようになった。

いつものように、ベッドにあぐらをかいて座り聖書を読んでいると、婦長が来て「あと一ヶ月もすれば退院ですね。ながい入院でしたね。お願いがあつて来ました。看護学生の実習に協力して頂けませんか?」と尋ねてきた。

よっちゃんは、すかさず「いいですよ、何でも協力しますから」と答えた。婦長と交代するように看護学校の主任教授が来て実習のあらましを説明してくれた。一〇日間ほど私の入院生活を観察するらしい。

数日後、看護学生は教授と共にやってきた。すらっとした若くてきれいな女学生であった。それから毎日のように彼女は朝の一〇時ごろから三時過ぎまで私と共に過ごすことになった。

私が散歩に行く時も一緒にあるく。靴をはきかえ寒くならないようにカーデガンをはおろいてくる。彼女は関大付属高校から日大医学部看護学科へ入学した三回生である。家族は両親と弟がいる。よっちゃんは、持ち前の好奇心と聞き

上手で何でも聞いたがプライバシーの事なのであまり詳しくは書けない。

よっちゃんは、彼女に「なんで関大に行かんかったん?」と聞くと「将来を考えたから看護師の方がいいかと、親戚に医者がいたのでその影響かな。ホントは薬学部へ行きたかったんやけど。親しい友人は神戸にある大学の薬学部に入學したけど気に入らずやめて他の大学へ行くと言って勉強している。私も、どうしよううかと迷っているんです。弟も進学高校へいってはいるんですが、もうひとつやる気がないので、私がしつかりしないといけないのですが」

ながい入院で看護師たちの仕事はある程度は知っている。女の人が一生涯続けられる仕事として看護師は良いかもしれないが、あまり夢のある仕事ではない。機械的になった検査や患者とのやりとり、昔の看護師のイメージとはだいぶ違ってきていると思えるからである。よっちゃんの看護師イメージは小学生のとき世話になった看護婦さんである。

田舎の診療所で働いていた同級生のお母さん。きれいで賢く優しいまなざし、これが憧れの看護師さんなのである。

しかし、いまの看護師さんは忙し過ぎる。話をするのも検査をするのも忙しいうだ。医者よりも雑務が多すぎるように感じた目にはみえる。ゆっくりとした時間を感ぜさせる温かさを看護師さんに期待

するのは酷とてもんだと、よっちゃんは考えたのである。

わが娘もそうだが、今の娘たちは迷っている。どう進路を考えればいいのかわからないのである。大学を出て就職し結婚し子育てを終え親の介護をしていたら、あつと言う間に婆さんになってしまう。そんなのは嫌だ、自分の夢をかなえたい、自分の人生を生きたい。恵まれた環境で育った為か、果てしなく夢は膨らんでいくが現実がついてこない。我が娘などは、おしゃれに金をつぎ込み遊びに呆けるからか、いつも金が足りない。それでいて夢だけは大きなことを言っている。

看護学生の彼女は、我が娘とちがつてしっかりといていそうに見えたが、話を聞いていくと似たり寄ったりだと思うようになった。同じ時代を生きている年頃の娘がそう違うはずはない。

彼女と娘の違いは、彼女は勉強熱心で堅実であるのに対して、娘の方は勉強嫌いで遊びっぽい事である。彼女の悩みは、男友達が出来ない事である。どうもうまくつきあえないらしい。

堅実な性格の為に遊べないという、かたや娘ときたら男たちとつきあって選り好みを繰り返している。良いか悪いかは別として、コミュニケーション能力は娘の方があってもいい。しかし、将来に迷っている点では同じで、結婚なんてしないと思っているのも彼女と同じ。こ

ろころ変わる娘の心もようは、よつちゃんには、さっぱりわからない。

ベテランの看護師さんも話を聞けば、似たような悩みがある。迷いが感じられない人は、自分や家族が病気になったりしたか、ナイチンゲールの本に影響を受けた人たちである。何がしらの使命感を持ち、迷いなく看護師の仕事を続けられればこんな幸せなことはいだろう。

女学生は、純粹培養で育ったお嬢さんであるから迷いもあるだろうが、これからいろいろと経験してゆけば立派な看護師さんになるにちがいない。

しかし、よつちゃんには、ホステスさんがついてくれたようなものだから、毎日がうれしくてしうがなかった。長期入院のご褒美かと思つたのである。



連載「おつちよこチヨイぼけ」 (33)

——昭和女、どっこい日記——

ああ、ぬかるみのような歯科治療・前編…の巻

「ちよつとちくつとしますよ」。(先生、いちいち言わなくていいです。注射します、と言われた段階でわかってますから) 「痛かったら、左手を挙げて下さい」。(イデデデ…。痛い…。しかし、このぐらいで手を挙げるわけにもいかないやろなあ、イデデデ)。(一)の中は、私の心の声である。このところ、毎週歯医者に通っている。

思い返せば、あれは九月のある日曜日。会社の顧問の傘寿のお祝いの会に出席していた。出席といえば聞こえがいいが、実際は使い走り。二カ月も前からやれ案内状づくりだ、やれホテルのレストランとの打ち合わせだ、やれ参加者に配る記念品の手配だと奔走し、挙句の果てに当日は、顧問が仕切るメイク講習のモデル(美しいモデルではなくて、実習の際に使う「顔」を提供する役)まで務めるというハードワーク。ちなみに、会社というのは化粧品品の業界新聞。参加者は化粧品店の経営者で、読者でもある人たちだ。だから、傘寿の会という祝いの席だというのに、メイクの講習会なんて、ひと迷惑なことをしぶしぶでもやらねばならない。挨拶やら乾杯やらの後、お食

事、その後、メイク講習という段取りだったのだが、そのお楽しみのお食事が始まった途端、歯にかぶせてあったモノが取れてしまったのだ。リーガロイヤルホテルの高級フレンチ。会費一人一万五千元で、うちお食事代一万元(五千元は顧問に渡す、お祝いの旅行券代だ)。ランチタイムでこのお値段だから、当然コース。

その前半に出てきた何とかジュレ、ゼリーみたいなフルフルした食べ物を口に入れて「うまつ!」と思つた瞬間に、ごきりと音がして、歯が取れてしまったのだ。我ながら情けないシチュエーションである。ほかの参加者に気取られないよう、ナプキンに取れた歯(かぶせていたモノ)を吐き出し、口の中を舌で探ってみると、今まであったはずの歯がない。ちよこつと固いモノには触れるが、それは歯というより、何かの芯。

たった一つ、幸いだったのは前歯ではなかったことだ。私は素知らぬ顔で食べ続け、口の中に突然できた洞(うろ)を秘めたまま、モデル(実習台)まで務めて、翌日の朝、歯医者者に飛んで行った。

会社の顧問の傘寿の会で歯が取れたのだから、これは明らかに労働災害、少しは気の毒がられてもいいと思うのに、会社の若い子にケラケラ笑われた。「アハハハ。何で、そんな柔らかいもんを食べて歯が取れるんですか。そっか。ふだん、食べ慣れてないから、アゴがびっくりし

たんですよ」。ほつとけ!

何年か前から、そろそろ歯医者に行かねば、とは思っていた。でも、忙しかったし、とくに痛みがなかったのでズルズルと先延ばしにしていた。だから、この機会に、取れた歯を修繕し、ついでにたまりにたまっているであろう歯垢を取ってもらって、虫歯もある感じだから、これも治してもらって、とまあ三週間ぐらいはかかるかな、と踏んでいたのだが、甘かった。かれこれ三カ月。毎週、ときには週に二回通い、しかも一回の治療時間がやたらに長い。私は歯医者泣かせの、重症患者だった(と思われる)。レントゲンを撮ってもらったら、虫歯、歯周病、歯肉炎、歯垢とおよそ歯の不具合のすべてが、高レベル(低レベルというべきか?)で集中。ガッタガタだったのである。

幸か不幸か、この歯医者さん、若くて背が高く、ハンサムかどうかははっきりわからない(マスクをしているから)が、熱血歯科医であった。患者に真剣に向き合い、徹底的に治療し、歯ブラシ指導を行って、虫歯になる前に歯垢除去などを施す予防歯科の大家。その前に現れた、不徳の患者が私だった。

「歯の中から膿が出ていて、少し顔も腫れてるな…」(先生、歯の膿はともかく、顔の方は生まれつきです)「切開して膿を出さな。麻酔をするけど、以前、麻酔で

気分が悪くなったことは?」「いーえ、いーえ」大口を開けているから、まともに話せないが、麻酔なしでやるか、と言われたら大変だから、ここは慌ててお返事する。

麻酔の針はとても細くて、すんごく痛いということはないが、ぷすぷすぷすぷす刺されると、さすがに痛い。だが、うつかり左手を挙げて麻酔の量が足りなかったら、あとで激痛を強いられそうなので、ここは我慢。麻酔という現代の発明の中で最も人類に貢献してくれている医薬品のお陰で、そこから延々と続いた、ギリギリガシガシグイグイ（これらの音は、ほとんど歯垢を取る際に出たもの。でも印象的には、こういう音が象徴する、力仕事を口の中でされている感じだった）はそんなに痛くはなかった。怖いのは十分、怖かったが。

不思議だったのは、治療されている歯ではない歯が妙に痛かったことだ。口の中の仲間の歯がひどい目に遭っていることがわかって、同調しているのだろうか。

抗生物質と痛み止めを処方され、「何かあったら、夜間緊急（歯科治療）に行くように」と帰された。幸い、夜間緊急のお世話になるようなことはなかったが、なかなかの重症ぶりだったことがわかっていただけたと思う。

それから何回かの治療のあとで、やっと膿が止まり、その問題の歯以外の治療

が始まったのだが、これがもう「ぬかるみ」。長年、放置していたため、歯石を取るのもひと苦労。先生からバトンタッチした若いきれいな衛生士さんが「大丈夫ですか?」と聞いてくれるたびに、「あい、だいじょおおぶです」と大口を開けたまま答える。正直に言えば、かなり痛い瞬間があるが、そのたびに左手を挙げてストップしてもらうわけにはいかない。

先生は毎回のように、いちいち小さな鏡を私に持たせて口の中を見せ、「ほら、ここがこうなってるのがわかりますか」と歯ブラシが十分に当たっていない箇所などを指摘。私自身の名譽のために言わせていただくが、私は歯を磨いていないわけではなく、力任せに磨き過ぎ、そのくせ磨き残し多々ありタイプ。性格とか生き様まで否定されているようで、ほんと歯科治療って辛い。

(A〇)



素老人☆よもだ帳 (21)

坂本 一光

次もアベー次もアベーはごめんです

大阪府寝屋川市は京都から大阪に流れる淀川の左岸にある。対岸には茨木市、高槻市が広がる。高度経済成長期に大阪の衛星都市として発展した。私はこの町に、結婚した昭和四十八年（一九七三年）から就職して島根の大学に単身で行く昭和五十九年（一九八四年）までの十一年間住んでいた。家族は平成二十一年（二〇〇九年）まで住んでいた。十一年の内訳は、修士課程二年生から博士課程を終えるまでの四年間と、オーバー・ドクターという就職浪人をした七年間である。その間私は京阪電車で京都に通う学生であった。そのうち数年間は、朝、子どもを保育所に預けて九時過ぎの電車に乗り、京都に向かった。大学に着いて実験の準備をするともう昼時で、帰りは最終電車ということもよくあった。妻の仕事の関係で子どもを保育所に迎えに行くときは、四時には大学を出るので実験はあきらめた。子どもがぐずって泣いたりすると、「泣くな、俺だって俺の人生で精一杯なのだ」と腹の中で毒づいたりしたこともある。

しかし、今日の話はそのことではない。毎日京阪電車に乗っているときは気づきもしなかったが、研究会であちこちの大

学に行く機会が増え、見知らぬ土地の私鉄や国鉄、地下鉄に乗るようになって気づいたことである。知らぬ土地で電車に乗るときには、事前に調べていても乗換えや降りる駅が気になるものである。特に私鉄では、通勤快速だの準急だの区間快速だの固有の名前の電車が走っていて、目的駅に止まるかどうかよくわからない。そんな状態で電車に乗ってしまい路線図が近くないときは、車内放送が頼りである。その車内放送が何とも聴きとりにくい電車が多いのである。中には走行音が大きくなるのを待っていたかのように放送を始める電車もある。毎日乗っている人には車内放送は要らないかもしれないが、旅人には不親切な話で、第一聴きとれない雑音のような放送は毎日乗っている人にも不愉快であろうに。京阪電車を見習え、と思ったときハツと気づいたのである。

京阪電車の車内放送は、放送音がとりわけ大きいわけでもないのに大変聴き取りやすいことに改めて気づいた。今思えば、おそらく、全国車内放送明瞭度コンテスト一、二位は間違いないであろう。車掌の発音は明瞭で、声にふくらみがありつやがあるとでも言おうか。初めて乗った人に親切な放送である。どんな車掌教育や訓練をしているのか、これは大事なことだと思っただけである。

それからは、毎日車内放送を意識して聴くことが多くなった。一番後ろの車両

世界一周旅行記 (18)

若山 哲郎

さらばラバウル

に乗り、目をつむって放送を聴く。明瞭で色つやのある声を聞き、車掌さんを見る。アツと思うほどに声と顔が一致する。ときもあるが、エツと思うほど声と顔が合わないこともある(主観です)。合わないときの方が多かった気がするが、私はしばらくの間、それを楽しんでいた。そんな中で、今回の話のハプニングは起きた。そのころ大阪側の終点は淀屋橋で、京橋を出るとすべての電車は、天満橋、北浜、淀屋橋の順に止まる。さて、淀屋橋行き電車に乗っていて、電車が天満橋を出たときである。車内放送は「次は淀屋橋、淀屋橋」と告げたのである。アツと思ったが、しばらくしても訂正放送はない。プロの車掌が間違いに気づかないはずはないのに。

何回か記憶にある間違いは、電車の走る方向を逆に勘違いして起きる単純ミスである。京橋を出た京都三条行きの急行で、次の停車駅は香里園であるのに「次は天満橋、天満橋」の放送を聞いたことがある。もちろん、すぐに「失礼しました。次は香里園、次は香里園」の訂正放送があったことは言うまでもない。今回のような、全電車が必ず止まる連続した駅を一つ飛ばす間違いは初めてであった。電車は北浜に着いた。車内放送は何事もなかったように「北浜、北浜」と告げた。エツ、エツ、エツ、である。先ほど「次は淀屋橋」と言ったではないか。それを訂正もしないじゃないか。よー

し、それならわかった。問題は次の淀屋橋だな。もし、「次が淀屋橋、次が淀屋橋」と放送したら、先ほどの間違いを訂正していないけれども、間違い自体は自覚していたものとして許してやろう。しかし、「次は淀屋橋、淀屋橋」のときは一言、間違いを指摘してやらねば、と心に決めて発車を待った。ドアが閉まり、電車は北浜を出た、そのときである。車内放送は高らかに告げた、「つぎもーよどやばしー、つぎもーよどやばしー」。噴き出すほかないことではあった。

それにしても、である。来年、衆参同日選挙でもあつて、「次もアベ内閣、次もアベ内閣」だけはこめんこうむりたい、と思う。「すべて歴史上の大事件、大人物は二度現われる。一度目は悲劇として、二度目は喜劇として」という言葉があるらしいが、三度目はごめんである。

■大分の素老人

なお、「次も淀屋橋」の話は、大阪の国語の先生の講演に出て来た話である。本当のことか、国語の先生のこと、助詞「は、が、も」の説明のためか、不明である



夢の島タヒチを二月十五日に離れそれから太平洋を航海することなんと十二日間、二月二十七日はいよいよ最後の上陸地になります。それはラバウル。一月三十一日に南米ペルーを出たのですから太平洋は広大です。船内は相変わらずイベントと友達との交流、企画などで忙しく毎日が過ぎて行き、日本からこの時ばかりと持ってきた段ボール箱いっぱいのはまだ一冊も読んでいません。思わぬ計算違い。そしてゆっくりと船上から海を見ている時間ありません。音楽バンドの練習や合唱練習、俳句の会の作品展準備、英語クラブの交流とかで大忙しの毎日。そして太平洋の波が静かなため全然船が揺れることがありません。鏡のような海面の毎日。私達が幸運だったのかも知れませんが、この海で遭難するのなんて信じられないような穏やかさ。手漕ぎボートだって渡れそうです。

さてラバウル、昭和人なら誰でも知っている地名ですが、正確な位置はというと戦後世代はよく知らないでしょう。かく言う私もここへ来るまでは全く知りませんでした。パプア・ニューギニアのニューブリテン島の東にある港町です。パプア・ニューギニア国、ここもかつては西欧列国の植民地だったところで非常に

複雑な歴史があります。十九世紀の後半にはドイツが、ニューギニア島北東部とニューブリテン島、ニューアイルランド島を植民地とし、また南東部をイギリスが植民地とし、この地域は「パプア」と呼ばれました。一九〇六年にオーストラリアが英領パプアを引継ぎ、又第一次世界大戦の結果、ドイツ領ニューギニアも併合され「パプアニューギニア」と呼ばれるようになりました。そして第二次世界大戦での日本軍と連合軍の激戦を経て、一九七五年、英連邦の一員としてパプアニューギニアが独立を宣言したのです。いまだ植民地のタヒチやハワイなどと異なり今や独立国として自治が確立しているのが素晴らしいところですね。しかしニューギニア島の西側は何故か隣国インドネシアが侵略し現在そのままだなっています。

さて、ラバウル、港町といっても村みたいな小さな所、かなりさびれています。聞くところによると最近の火山噴火により主要な施設は隣町に移されたとか。停泊した船上からは遠くにいまだ噴煙を上げる火山が見えました。しかし、こんなところにかつて日本の軍港があり、基地があつたとはなかなか想像できません。太平洋戦争といえばポートモレスビーを思い浮かべますが、ラバウルはポートモレスビーと陸続きと思っていました。なぜかという太平洋戦争時にポートモレスビー攻略のための前線基地だったからです。ちょうど船内で映画「さらばラバ

大人の今昔物語 (17)

石川 吾郎

今回は岐阜県を流れる長良川の洪水にまつわるお話です。昨今の日本の災害の多さを考えると、他人事ではすまされない話です。教科書に出ない度は一／五。

美濃の国、因幡河（長良川）の洪水で人が流された話 巻二十六ノ三

今は昔、美濃の国に因幡河（現在の長良川）という大きな川があった。大雨が降り増水するときには、大洪水となる暴れ川である。そんなわけでこの川の辺りに住む人々は洪水になったときに避難する構えとして、家の天井を強く造り、板張りの床のように堅固にして、いざ出水というときにはその上に登り、食事までできるようにしていた。

男たちは船に乗ったり、泳いだり歩いたりして出歩くのだが、幼いものや女たちをその天井に避難させていたのだった。その天井のことを人々は「つし」と呼んでいた。

この因幡河が大洪水を起こしたときがあった。水位が天井をはるかに越えてしまい、付近の家はことごとく流され、多くの人が皆死んでしまった。この中で天井の上に女を二三人、子供を四五人乗せた家があった。並の洪水の時には柱もすっかりして天井もがんにようなつくりでびくともしない家だった。このがんによ

は来るべき所を間違っていると思います。だから日本は何年たつてもまともな戦後処理が出来なくてアジア諸国からいまだにクレームをつけられるのでしょうか。しっかりしてよ、大人も子供も。ピースポートもいいかげんにしろ。ピースの音が聞いて呆れる。午前中、ラバウルの山の中腹にある慰霊墓地に参拝し、その場所で式典が開かれました。ラバウル市長も来られてメッセージを述べられました。その中で言われたのは、あの戦争は私たちつまり現地の人々の戦争ではなかったということです。現地の人々にとつてみればえらい迷惑、自分達の住んでいる所を勝手に戦地にされたのですから。あらためて日本人だけの追悼ではなく現地の人達への謝罪も合わせて行わねばと思いました。現地の若者が式典で日本の歌をうたってくれました。ラバウル小唄 荒城の月なんかです。あんなことをされても日本を恨まず、この船の若者より余程しっかりとっていました。その後、「ヤマト・バンカー」すなわち山本五十六司令長官がラバウルを視察したときの地下司令室に行きました。ご存知のように山本五十六はここラバウルを視察後、アメリカに暗号を解読されブーゲンビル島上空で撃墜されました。日本の情報に敵国に筒抜けであったという太平洋戦争中最大の象徴的な事件です。一九四三年四月十八日のことです。日本本土で国葬が六月五日に行われました。ここで止めればよかった戦争を。しかしアメリカが言う「頭ひ

ウル」が上映されました。それを見て再認識しました。日本軍はここラバウルをオーストラリアから奪取し、日本本土防衛の最重要航空隊基地として九万人もの人を配置して備えていたのですが、アメリカ、オーストラリアは強固な反攻が予想されるラバウルをあえて攻めずに包囲する作戦をとったのだとか。もともと北寄りの日本に近い島にねらいをさだめて獲得し、日本本土爆撃を可能にしました。こう言つては何ですが無駄に駐留していた訳です。その当時はもう日本軍には輸送機も船も十分になかったわけですからどうすることもできません。そして同時に日本軍は当初から現地調達の自給自足主義、十分な食料補給も無い中飢えや病気で戦闘以外の無駄な犠牲者をたくさん出しました。とは言えこの島からも爆撃に出ていかなくてはならないし、空襲も受けました。映画はそのような時代を描いていました。

このようにラバウルといえば悲惨な太平洋戦争の地、なので、この地のツアーは、戦没者の供養と戦歴を訪ねる、というのに参加しました。しかし、ふたを開けてみると参加者はたったの三十五名。私が驚いたのは一〇〇〇人も人がいて戦争関連のツアーに参加した人はごく少数だったことです。若者達の多くはダイビング、温泉。大人の中には船中で社交ダンスの最終発表会の練習をしている人やマージャンをしている人もいました。なにをしても自由ですが、これらの人々

うな家も、このときには柱は浮き上がらず家の棟と天井がばらばらにはならなかったものの、家全体が水に浮かんで船のように流れていったのだった。

高みに逃げ延びてこれを見ていた者たちが「あの流れていく者たちは助かるんだろうか。どうなるんだろう」と、取り沙汰をしている内に、その天井で炊事をするためにおいていた燠火に、風が強く吹いて屋根の上板に吹き付けたので、火が付き燃え上がってしまった。天井に居た人々は声を挙げて叫び合ったがどれも助けにいける者はなく、見る間に燃え尽きてしまい、水に流されて死ぬかと思っていたところ、人々はみんな火で焼け死んでしまった。

「水に流されていく間に、火に焼かれて死んでしまう。なんということだ」と、打つ手もなく空しく見守っていると、その中に十四五才ばかりの子供が火から逃れて、水に飛び込んで流れていくので、それを見ていた者たちは、「あの子供は、火難を逃れはしたが、もう助かることはなからう。溺れて死んでしまう運命なのだ」と言い合っていた。ところがその子供が流されていくうちに、水面に草より短いほどの青い木の葉が出ているのに手が触れたので、それをつかむと、それに引つ張られて流れなくなった。そこでこの木の葉が強いと感じ、力を入れて引つ張ってみると何とそれは木の枝だったので、さらに力を入れてこの枝につかまっ

た。

* *

ところで、この川は大水になると思えばすぐ水の引く川なので、やがてだんだん水が引いてくるうちに、この引つ張っていた枝がだんだん水面に姿を現し、木の股が出てきたので子供はその股にちよこんとすわって「水が引けば、助かるだろう」と考えていたのだった。しかしそのうちに日が暮れて夜になった。あたりは真つ暗闇になり、物も全く見えなくなったので「今夜は水が引くのを待つて、この木から降りよう」と考え、その子供は夜の明けるのを今か今かと待つていた。やがてようやく夜が明けて日が昇り、下を見ると目も届かぬほど、雲の中かと思うほどの高さのような感じがしたので、よつく見ると山の峰の上から深い谷に傾いて生えている木が、途中で枝がなく三〇メートルばかりの高さのてっぺんあたりの小枝を引つ張つていたのだった。

少しでも動いたら、枝がゆさゆさと揺れて折れてしまう。落ちて身体は粉みじんだと思うがどうしようもない。子供心に観音さまに祈り「どうぞ助けてー」と叫ぶがそれを聞き付けてくる人もいない。「やつと水から助かったと思ったら、火に焼かれそうになり、火から助かったと思つたら、今度はこんな高い木の上から落ちて死んでしまうとは、なんて悲しいんだ」と考えているうちに、この叫ぶ声をかすかに聞きつけた人がいた。「あそこ

にいる子供は、昨日水に流され、その上で火に焼かれ、家から水に落ちた子供だろう。あれは何とかして助けてやろう」と考えたが、何せどうにも助けようがない。

その木の元を見ると、枝もなく掴まえる手掛かりがない。三〇メートルの高さの木で、足場を降ろすような方法もない峰なので困りはてていたところへ、事情を聞きつけた人々が大勢集まつてきて方法をあれこれと議論したが、これといつて良い手はなく、途方に暮れていた。そうこうするうち、その子供が叫んだ。「もう我慢できない。このまま落ちてしまう。同じ死ぬなら、網をたくさん集めてそれを張つて受けてください。その上に落ちれば助かるかもしれない。」これを聞いて人々は「それもそうだ」と言つて、その付近にあつた網をたくさんもつてきて、強い縄で高く張り、これを支えにして網を幾重にも重ねて張つた。子供は観音を念じて、足を離して網の上に向かって飛び降りた。するとその身体はくるくると回転した。それほど高かつたのだ。観音のご加護だつたか子供は網の上に落ちた。人々が近寄つてみると、意識をなくして動かない。その身体をそつと降ろして介抱すると、二時間ばかりで目を覚ましたのだった。

まっこと九死に一生を得た者だ。水難や火難、さらにはバンジーなみの飛び降り。こんな目にあつても生きているとい

うことは、よほど前生によいことをしていたのに違いない。この話しは隣国まで広がり、これを聞く人々は皆、信じ難く珍しいことだと思つた。

この話しを考えるに、人の命はどんなものであれ前生の宿報によるのだと、人々はみな言いあつていたと語り伝えているとか。

《コメント》

これは私の故郷、長良川にまつわる話です。長良川は昔から洪水をよく起こし、特に下流の木曽・長良・揖斐の三川合流部では、頻繁に洪水があり、「輪中」が発達していたことは有名な話です。これは社会科の教科書にも出てきます。この地域の家の造りもこの話しにあるように、二階をしっかりと造り、避難できるようになつていたようです。実際、一九七六年には長良川の氾濫によつてこの地域が大規模に水に浸かり、新幹線も不通になったことはまだ生々しく覚えています。（この洪水で輪中の有用性が再認識されたとのことですが）

こういった事実からすると、この話の前半はまさに、この地方の地理的な特色とぴつたり符合するのですが、高い木の枝にひっかかる場面以降はどうもウソくさいのです。つまりこの地方は濃尾平野の平らな低地であるために洪水が起こりやすいわけで、三〇メートルもある木は生えてはおらず、ましてや高い峰や谷が

あるわけではありません。

こう考えると、洪水に流される前半の
話に尾ヒレが付いて、まるでハリソン・
フォードの映画「インディージョーンズ」
のような、冒険譚に仕上げられたのだと
思います。このことで奇譚としては派手
になったものの、そのかわり決定的にリ
アリティがなくなってしまうました。同
情的に見ると、おそらく前半の部分に近
いことは事実としてあったのではないで
しょうか。

この話は、私の故郷への愛着の一つの
現れとして、載せてみました。

〔広告〕 街を歩けば◆に当たる？

冷え込みが急に加速した今日この頃、
いかがお過ごしでしょうか。コタツでの
休眠モードもいいですが、外に出て街を
歩いてみませんか。思わぬ発見と出会え
ることもあります。

●旧淀川(大川)沿いを歩いて大阪湾を目指す

12月16日 淀川ウォーク

●石が伝える京都のもう一つの顔

1月17日 北白川石橋めぐり

●和歌の古跡を求めて

2月2日 千代の古道

京都クルーズ・ザ・プロジェクトでは、他
にも楽しいプランを多数ご用意しております。

(<http://kyoto.cruise.sakura.ne.jp/index.htm>)

または 075-711-5656

言葉が熟するということ (2)

大江 雉鬼

世の中が新しいステージにさしかかる
と、新しい言葉が大量生産される。古く
から蓄えられてきた言葉の抽斗をひつ
り返してみても、目の前に現れた事象を
説明するのに足りないのなら、そこに新
しい言葉が求められるのは、言わば当
り前のことである。しかし、従来からあ
る言葉の遣り繰りだけで対応できるとこ
ろまで新しい言葉に置き換えるのは戴
けない。況んや説明の不完全さ補うため
の新語ではなく、目新しさを生み出すた
めの新語あるいは消費欲を刺激するた
めの新語なら、もはや目障りでさえある。言
葉の保守主義者を自認する者としては、
軽薄な流行語はいうに及ばず、無用な新
語にもお引き取りいただきたいと思う
今日この頃なのである。

煮え切らない愚痴から始まったが、毎
年の恒例行事「今年の新語流行語大賞」
のノミネートを見ていて、今年は例年に
なく思惑が目立っているなと感じたもの
だから、こういう形の書き出しとなって
しまった。個別にあれこれ言う気は起き
ないが、ひと言だけ添えるなら、この企
画はもう役目を終えているなという感想
である(ここで「この企画はオワコンだ
な、と言わないあたり自制心が利いてい
ると誉めていただきたい」)。

日本語の歴史を紐解くと、新語の出現

が際立つのは、当たり前のことだが、社
会の変革が顕著に進められた時期と重な
る。終戦直後、GHQによる占領政策下
の時代もその一つだが、近現代全般を俯
瞰するならば、近代の幕開けを告げる文明
開化の時期には特筆されてしかるべきも
のがある。

この時期の特徴で、よく指摘されるの
は翻訳漢語の創出だろう。漢字の組み合
わせ方だけに注目して言葉の来歴をたど
ると、見てくれだけなら経典などに同じ
ものがあつたりすることもあるが、その
場合でも指し示す概念は新しくもたらさ
れたものとして世の中に流布された。こ
のあたりは、原語の音をカタカナ表記に
しただけのものを嬉々として受け入れる
近年の傾向とは大きく異なっている。も
ちろん、明治翻訳語のすべてを称揚して
いるのではない。新生漢語といえどもト
ンチンカンなものもあるらしく、新しい
思想に接触したとしても、的確な翻訳語
がいきなり生まれたわけではないのであ
る。ただそれでも次第に座りのいい言葉
へと淘汰されていったようだ。このあた
りの事情は、テレビや雑誌などの、エン
ターテインメント関連の方面から漏れ聞こ
えてくる、いかにも狙ったような造語を
流行語めかして広めようとしつつ、実態
が伴わないがために廃れていくのと似て
いそうだ。

ともあれ、明治の初頭には、必要に迫
られる形で新しい概念を指し示す漢語が

たくさん創出され、そのうちのいくつ
かは現代人も使うところの、ごく普通の日
本語となっている。社会、自由、概念、
情熱……などがそれで、抽象度の高い言
葉が目立つのは、それまで日本には馴染
みの薄かった思考法が移入された結果で
ある。

ここで翻って現代の新語事情を考えて
みる。二十世紀最後の十年あたりからコ
ンピュータが日常生活に入り込んでくる
と、言葉の上でも耳慣れないものが毎年
のように登場するようになった。IT用
語と総称されるものには、電子工学方面
の専門用語だけでなく、インターネット
を活用したビジネス方面の用語も含まれ
るし、場合によってはネットスラングと
呼ばれる素性不詳の言葉が紛れ込んでい
ることもある。

テレビのCMを思い起こせば、数年前
まではユビキタスという言葉が積極的
に用いられていたが、いつしか聞かないも
のとなった。それに変わってということ
なのか、ビッグデータという言葉が頻
りに使われるようになった感もあったのだ
が、それも一時の勢いを失いつつある。
そして、それらに変わって登場したソー
シャルメディアあたりが幅を利かせてい
るのが昨今の言葉の情勢だろうか。

技術の革新と社会的な需要のあり方に
よってスポットライトの当たる部分が日
に日と変わっていくことなのだろう。今
まで注目されていなかった言葉がもては

やされるようになったり、あるいはいきなりの凋落を味わったりと、まさに猫の目のごとく変転する流行の世界である。中には意味を十分に咀嚼されないまま死語化してしまうものもあるわけで、ユビキタスなどは、そうした一例である。ユビキタスという言葉が担っていた概念が無くなったのではなく、技術的な意味でいえばネットワーク化という、より包括的なものの中に溶け込んでいるのだが、言葉の定着という側面で見ると死語となったと言つて差し障りあるまい。これとよく似た現象は、実は明治の頃にも起きていた。翻訳語の「社会」が定着するまでの間、「仲間連中」や「人倫交際」なる言葉が *society* や *social* の訳語に宛てられていたというのだが、定着する前に淘汰されたという点では、ユビキタスと同じである。

ところで、一時の流行からの凋落の憂き目にあつた言葉を見ると、その言葉がなぜそういうことになったのだろうということが気に掛かる。大雑把に言えば、需要に応えるものではなかったからなのだが、それなら前提となる流行はなんだったのが問題になる。ここで思惑が優先されていたに過ぎないという思惑万端論をぶつけることも可能だろう。ユビキタスやビッグデータなる言葉が時代の寵児であるかのごとくもてはやされていた頃、背後に某巨大広告会社の戦略があるかのような噂も聞こえていた。たとえ含

むところがあつて、あるいは含むところだらけの人為的なものであつたとしても、言葉を流行らせてしまえば、それに伴う需要が喚起されるとの方針があつて云々というのなら、まさしく思惑である。しかしそれがすべてであるというのは早計だろう。広告戦略に基づいてクロースアップされることはあつても、何もないところに戦略を組むのは不可能だからである。世の中の風向きを読む風見鶏的なアンテナが、形になる前の可能性の段階で反応したのがユビキタスないしはビッグデータなる言葉だつたのだろう。ところが、風見鶏が反応したまではないが、生憎なことにアテが外れたというか、事前の読み通りには展開しなかった。可能性を膨らませるところまでは行つたが、世の中に言葉を定着させる段階までは進まなかったのである。

その昔、一大キャンペーンとして展開された「デিকাバージヤパン」は、高度成長期の後の潜在的な社会的心性をうまくつかみ取るものだったがゆえに、歴史的な眼差しからも相応の評価になるのだが、同じ目論みはユビキタスやビッグデータでは通用しなかった、ということなのだろう。本当の意味で世の需要にマッチする言葉なら、流行は流行で終わらないし、先物買ひ的な生臭さが漂ってくることもないはずだ。

編集後記

もう師走になつてしまつた。歳をとるほど早く時間がたつ、と言われるが確かだ。二十歳までは早く大人になりたいと願いながら生きていたためか、一年が長かった。それが今では、毎月の支払いに追われているためか、やけに早く月末がくる。

時間も追いかけると逃げるように時がたたないが、時間に追われていると、あつという間に過ぎていく。微妙な心理です。

この「芥川だより」もずいぶん長く続いているようでもあり、つい最近のようでもある。ほんの少しだけでも、だれか一人でも喜んでいただいておれば嬉しいです。(嘉)

お知らせ

今月の一〇七号から「芥川だより」の購読料を一部一〇〇円と改定させていただきます。皆様のご理解とご支援を引き続きお願い申し上げます。なおインターネットネットでは、バックナンバーも含めて無料で公開し、多くの方々に御覧いただけるよう努めておりますので、そちらもご利用ください。

「反安倍・反戦争法制の統一候補のファンクラブ」を立ち上げ、署名を集めていきます！ (change.org を利用しています) 私たちは、憲法違反の安保法制を国会でこり押しに「成立」させ、日本を戦争の危険にさらす安倍政権をこれ以上放置することはできません。安倍政権を引きずりおろすためには、国政選挙で与党の優勢をくつがえす必要があります。

そのためには、野党の間の選挙協力により、反安倍・反戦争法制の統一候補を立てる必要がありますが、野党間の協力はなかなか進んでいません。

そこで、反安倍・反戦争法制の統一候補であれば、どの党に所属していてもその候補を応援・支持することを表明する、という主旨です。

これによつて多くの方々の賛同が得られれば、反安倍・反戦争法制の統一候補を立てるための後押しになることを目指しています。

賛同をよろしく願います。

《アクセス方法》

ツイッターの石川吾郎氏のページ
<https://twitter.com/55gogo>

の一番上のツイートから「反安倍・反戦争法制の統一候補のファンクラブ」にアクセスしていただき、署名(本名でなくても可能)とメールアドレスの登録をよろしく願います。

<https://goo.gl/b1VqIf>

または、「反安倍・反戦争法制の統一候補ファンクラブ」を検索してください。

生きている幸せ

毎朝、楽しみにしながら読んでいた小説「青い雪」一人の農家の主婦が、いろんな苦難にも負けずに、純情に物事を考えながら生きてゆく姿、特に夫婦間の問題にヒヤヒヤ。同胞に対しては「お天道さんが見ていられるよ」と。お互いに励ましながら生きてゆく姿。哲夫さん、美紀子さんのあり方。

次は、どう展開していくのか。

ヒヤヒヤ、ドキドキしながら読んでいく。でも、終わりは、個人の想像におまかせとばかりに、あっけなく終末となる。

北の大地のドラマではあったけれど、残念で今でも心に残り映画にでもならないかと。

精力的に家業に励む哲夫さんの姿と亡き夫の姿と顔とコトバと重なり、長所ばかりが耳につき目につき、今更ながら自分の足らなかつたコトバの不足。そんなことが思い出され、とにかく朝刊を読む楽しみが無くなったことは淋しい。

会えば必ず別れがある。生きている者は、いつかは死ぬ。当たり前のことだが、経験しないとわからない苦しみがある。

この年になって思ったことは

「人は、一人では生きられない」ということ。大勢の人との出会い、知り得たこと。折り目正しい人、私にはマネは出来ないけれど、じっくり物事を見つめ、自分自身をみつめ満ち足りたものが与えられている幸福を感じること。

夢中になれるものがあれば、人は生きていて救われると思う。

自分という存在は、どこまでも天地にただひとり

冬の訪れ

あちらこちらの垣根のサザンカが咲き出した。よく見れば、はちきれんばかりのつぼみが控えている。童謡の「たきび」のように北風は、まだ吹いて来ないが、季節は晩秋から初冬へと移る。

今年の冬は早そうなので、丹波の山奥なんかは、野菜の収穫や雪囲いを急いでいるみたい忙しそうである。もぎたての柿をたくさん頂いた。シャキ、シャキと歯ごたえがあり、秋の味が口中に広がる。早朝から鳥が群れて田んぼの中へ下り立ってきて何やら口にくわ

えて飛び立ってゆく。

雪国への思いも、おろそかになりがちだが、もう冬将軍が迫っているのだらう。

「墓参りするなら、雪が降らないうちに来い」と、電話のベルがいやに冷やかにひびく。

ほんとうの気持ち

「自分のことなら延命治療はしないで」といつても、家族が、その場面になったら、少しでも永く生きて欲しいと願うだろうか。

年寄りが会えば「ボックリ」という言葉が出て話題の中心になり花が咲く。

私は、寝たきりの連れ会いを見送ったけれど、息をしているというだけで、また違う道でつながっているのだと心丈夫に思ったことがある。けれども、鼻チューブの入れ替えの時は外へ出ていたけれど、とてもとても、延命治療はしてほしくないと思った。

その旨を小さな紙に書いて家族にわかるようにしておく事。いざという時に、周囲の者を悩ませない小さな思いやりだと。

そして自分が嫌だと思う延命治療を家族にするとしたら、あまりにも身勝手ではないかと思うのです

が、如何ですか。

俳句

土田 裕

職退きし

日も遥かなり冬の星

ここだけと

声低くしておでん酒

短日と言ふといへども

一日かな

茶房より

人の行き来を見て師走

親と子で

聖樹飾りし日の遠く